

EU、国家、地域の「協力」と「対立」を読み解く：協力言説としてのマルチレベル・ガバナンスと、対立言説としてのクロススケール・リージョナルガバナンスをめぐって



研究者所属・職名：法学部・教授

ふりがな こうじもと ひでお

氏名：柑本 英雄

主な採択課題：

- [基盤研究\(C\)「EU越境協力枠組みEGTCの研究：ハンガリーをめぐる重層的地域の権力関係」\(2020-2022\)](#)
- [基盤研究\(C\)「EU地域政策とクロススケールガバナンス：EUドナウ戦略の研究」\(2016-2019\)](#)
- [基盤研究\(C\)「EU地域政策とマクロリージョンの研究：北海マクロリージョン戦略策定プロセスの検証」\(2013-2016\)](#)

分野：国際関係論、国際政治学

キーワード：ガバナンス、スケール、マクロリージョン、領域的結束

課題

● なぜこの研究をおこなったのか？（研究の背景・目的）

「領域的結束」を促進するEUは、北海沿岸、バルト海沿岸、ドナウ川集水域などにマクロリージョンという地域概念を導入し、国家領域とは異なる地域協力を進めてきた。これらのリージョンでは「領域的結束が促進される」ことを前提に、ヒエラルキー的な構造のマルチレベル・ガバナンス（MLG）のモデルを使って、アクターの行動についての分析が行われてきた。しかし、Brexitにおける北海の漁業問題のように、EU、英国、スコットランド、アバディーン州政府など、それぞれのアクターが異なった意図のもと、垂直的に対立し、英国のEU離脱に続くようなことが起きている。これまでの地域研究分野では、「協力言説」としてのMLGが主流だったが、それに代わる「対立言説」の分析用具の必要性がクローズアップされたのである。

● 研究するにあたっての苦労や工夫（研究の手法）

どのようにして、同一領域における垂直的なアクターの対立の理由を明らかにすればよいのかを考え、政治地理学の「国家のリスケージング」の手法を取り入れた。さらに、この現象がEU・国家・地域というスケール間の対立の発現であり、新しい政策容器としてのマクロリージョンやマイクロリージョン（国境の跨境地域）でのイニシアティブの取り合いや規範形成のあり方に影響を及ぼしていることを分析することにした。

図1 ドナウマクロリージョン
(欧州委員会HP)

EU、国家、地域の「協力」と「対立」を読み解く：協力言説としてのマルチレベル・ガバナンスと、対立言説としてのクロススケール・リージョナルガバナンスをめぐって

研究成果

●どんな成果がでたか？どんな発見があったか？

現在起きている「スケール間のパワーの対立」を分析しうるモデルを組み立てるにあたって、北海地域委員会（North Sea Commission）、バルト海地域委員会（Baltic Sea Commission）、中央ヨーロッパ跨境域イニシアティブ（Central European Service for Cross-border Initiatives：CESCI）などの協力を得て、クロススケール・リージョナルガバナンス（Cross-scale Regional Governance：CSRG）のモデルを立案した。これは、MLGそのものの説明力が無くなったということではなく、欧州政治は現実主義的に傾くととき、理想主義的に傾くときがあり、MLGは前者の説明力に乏しく、現実をゆがめて説明する可能性があることを示している。CSRGモデルは、EU地域政策分野におけるEU、国家、地方政府間の垂直的な「統治の非両立性」をモデル化し、MLGでは議論されてこなかった政治的紛争や利益配分の対立を説明しうる。CSRGモデルを利用することで、個々のマクロリージョンでは一見システム的には同じように見えても、表1のように、中心となるアクターの意図によって国家主導型、地方政府主導型、EU主導型などに分かれることも明らかとなった。しかし、この類型化も国際社会環境の変化によって、ドナウマクロリージョンのように、国家の意図が大きく表出するなど、変容することもわかってきた。

表1 CSRGの3つの類型化（筆者作成）

マクロリージョン	バルト海マクロリージョン	北海マクロリージョン	ドナウマクロリージョン
EU加盟国（当初）	8	7（と1非加盟国）	9（と5非加盟国）
関連グランドデザイン	VASAB2010	NorVision	VISION PLANET
地域政策プログラム	INTERREG/バルト海プログラムなど	INTERREG北海プログラムなど	INTERREG 中欧+南欧スペースなど
既存の国際枠組み	Helsinki Commission	OSPAR Commission	Danube Commission
クロススケールガバナンスモデルの類型化	国家主導型 バルト海諸国評議会(CBSS)がコーディネート	地方政府主導型 北海地域委員会(NSC)によるコーディネート(自主的戦略)	EU主導型 欧州委員会地域政策総局によるコーディネート



図2 招聘講演を行ったCESCI設立10周年記念国際会議（Budapest, Apr. 2019）（CESCI HP）

今後の展望

●今後の展望・期待される効果

現在、CSRGモデルを使いながら、スケール間の対立分析をどのように他の地域に敷衍していけるのかを考えている。1つには、現在の科研費で取り組んでいる、CSRGモデルの「ハンガリーの跨境ミクロリージョン」分析への適用可能性である。2つめには、Brexitによる英国のEU離脱、スコットランドの独立の試みなど、EU共通漁業政策を巡る対立分析への適用可能性である。すなわち、一見、国家間の対立のように見えるものが、それだけではなく、その背景としてスケール間の複層的、乱層的、重層的な対立をはらんでいるということが見えてくる。また、3つ目に、このようなヨーロッパの対立的言説モデルが、EUのようなマザーアンブレラがない地域にも適用可能かどうかについてである。日本の「国家のリスケージング」については、大阪、沖縄の問題について政治地理学研究者たちが取り組んでいるが、政治学的にもスケール間の対立の観点からEU域外の分析にも適用していける可能性があると考えられる。